

精神科病院におけるケアの取り組み

医療法人青樹会青和病院

副院長 林 孝之様・ケアワーカー 佐藤 砂由里様

病院の紹介

青和病院様は、石川県の古都・金沢にある、病床数130床の神経科・精神科・心療内科からなる病院です。リハビリテーション病棟・老年期病棟・心の治療病棟の3病棟を擁し、それぞれ対象となる疾患や障害が異なります。今回は副院長兼看護部長の林様（以下林副院長）とケアワーカーの佐藤様に、病院での排泄ケアの取り組みについてお話をお伺いしました。

月1回の勉強会

青和病院様ではカンファレンスの際、排泄ケアについても話し合います。一人一人の患者様について意見を出し合い、必要なアイテムやアプローチの仕方、おむつを使用される方はサイズやあて方のポイントなどを決定しています。

「ご本人に装着して履き心地を比べていただくこともある。たとえばサイズはMが良いかLが良いか、薄型の紙パンツにパッドが良いか、それとも厚型の紙パンツ単体が良いのか、など。」とお話してくださったのは佐藤様。

「声掛けのトーンや技術など、細かいけれど一人一人によって変える必要がある。特に若い方はこだわりがあったり好き嫌いがはっきりしていることもあり、個別の対応がとても重要。」だとおっしゃいます。

病棟での勉強会では、皆でおむつの装着体験も行ったそうです。なんととろみを使って作ったいろいろな性状の疑似便をパッドに入れ、実際に装着を試みたとのこと。

「何時間耐えられるかの実験だったが、皆すぐギブアップした。2回3回分なんて絶対無理だという意見で終わった。」

この体験から皆が学んだことは、「“患者様は不快感は感じないだろう”とは思わないこと。寝たきりであっても、重い疾患を抱えていても、誰だってこれだけ不快なんだということを肝に銘じ、排泄のサインを見逃さない。特に便はなるべくトイレで排泄できるよう、コントロールやアプローチを心がける」だったそうです。

佐藤様は入職時、老年期病棟に配属となり、主に高齢者のケアに携わりました。その後、精神科のリハビリテーション病棟へ転属なされたものの、異動当初は患者様の状態やケアの内容など、全く違うことにとても困惑なされたそうです。

「転属した最初の頃は、老年期病棟に戻りたいとずっと思っていた。高齢者のケアはこちらが身をもって支えているという実感があるし、頼りにされているという喜びも感じられた。精神科病棟は自分で自分のことが出来る患者様がほとんどで、仕事をしているという感覚がなかなか持てないという印象だった。でも患者様と関わっていくうちに、だんだんと見守ることの重要性を感じるようになった。」

佐藤様の中で、患者様とのマンツーマンの関係が生まれてきたといいます。「対等に会話ができ、対等に思いを伝い合えるという関係は、老年期病棟では築くことがなかった。勝手な思いかもしれないけれど、（患者様と）信頼関係が築けた。その人をただ見守ることがとても大切なケアだということを学ばせてもらった。」

この春、佐藤様は老年期病棟に再び転属となり、高齢者ケアに携わっていますが、この経験は今の病棟でもとても活かすことができているといいます。「前にこの病棟にいたときは、お世話をすることで仕事をしているという気持ちになっていたところがあったかもしれない。精神科病棟で築けた患者様との関係を、この病棟でも築いて行けたらと思う。」

職員の意識統一

青和病院様では、カンファレンスの他にも、様々な職員の方の話し合いの場が設けられています。これはケアのマンネリ化を防ぐための大切なコミュニケーションなのだと林副院長はおっしゃいます。

「自分の今行っているケアを見直すには、他の人からの指摘が必要。皆でちゃんと指摘し合い、向上していく場を作る。でも、ただ間違っているというだけではだめ。しっかり説明して、教えることが大事。」

ケアは皆で作っていくもの、そしてそれを皆が提供できること。チームワークがとても大事だと続きます。

そして今の病院業界における深刻な人員不足の問題に対しても、求められるのは個々のケアの向上ということに尽きるのだとおっしゃいます。

「人員不足はどこ病院でも共通の問題。でも皆の中に患者様のためという意識があれば、絶対にいいケアができる。業務を終わらせること、時間を短縮することを優先にしたら、雑になってしまう。」

どうしても多忙な中で口から出てしまうのが、不満や愚痴。そしてその空気は蔓延し、患者様にも伝わってしまうもの。皆が患者様のためにどうしたらよいかを常に考えて行動してほしいとおっしゃいます。そして

「でも人手がない・時間がないはキリがない、頭が痛い…」

と笑っておられました。

今後の目標

佐藤様が目標として掲げられたのは、排泄ケアの改善。

「今病棟では、おむつゼロが目標。そのために現在取り組んでいるのが、おむつからパンツへ、せめて日中だけでも変えていけるようにすること。」

その方にとって良い方向へ向かうようなケアをしていきたいとおっしゃいます。

「将来的にはその方におむつが必要となる時がくるかもしれない。けれど、人間らしい生活を少しでも長く送っていただけるようにしていきたい。」

そして皆が経験した便失禁の不快感に対し、林副院長はこうおっしゃいます。「我慢の限界が失禁、どんな精神科疾患を抱えていても、これはごく人間的な健常な部分の叫びだと感じてほしい。」

そのためにも、勉強会やカンファレンスでケア向上をテーマに取り上げ、患者様の快適性を追求するような議論をしていきたいと佐藤様はおっしゃいます。

林副院長の目標は職員の方のやる気意識の向上。

「もっと達成感・満足感を味わえるような仕事ができる環境を作りたい。そして、自分がここで働いている意味をいつも感じてほしい。」

お話をされるお二人の言葉や表情から、職員の方や患者様方への温かい愛情が強く感じられました。



ケアワーカーの佐藤様（左）と林副院長（右）



千葉県にある有料老人ホーム「エクセルシオール稲毛海岸」様。
 こちらの施設は、ご入居者様の個々の生活スタイルや趣味、こだわり、思い出等々、その人が大切にしたい暮らしを最優先に考え、ケアサポートを行っています。今回はそんな施設で暮らす皆様の日常取材しました。

趣味と暮らす

宍倉様のお部屋はさながらアトリエ。壁際の大きなデスクには絵筆や絵の具の他、以前から書きためたスケッチブックの数々が所狭しと並んでいます。宍倉様の描かれる作品はポスターのような鮮やかな色遣いが特徴で、見る人の心を魅了します。施設では宍倉様の作品の展示コーナーを設けています。（写真①・②）

ご夫婦で暮らす

佐藤様はご夫婦で入居され、仲良く暮らしていらっしゃいます。取材でお部屋を訪ねた際は、お二人でお茶の時間を楽しんでおられました。奥様のチャ子様は手芸が得意で、手作りのフクロウのマスコットをお土産に頂きました。とてもかわいらしくて感激です。（写真③）

思い出に囲まれて暮らす

村井様のお部屋にはくくりつけの棚があり、いろいろな木彫りの置物が並んでいます。これは全て村井様の手作り。以前は木彫り彫刻のお教室をされていたそうです。棚の上に飾られた木彫りの時計がひと際目を引きます。（写真④）

こだわりの空間で暮らす

寺畑様のお部屋は和風スタイル。じゅうたんを敷いた床に使い慣れたテーブルと座椅子。ここでテレビを見たり本を読んだりして過ごすのが一番落ち着けるのだそうです。ちなみにテーブルは冬になると炬燵になるそうです。（写真⑤）

夢プランの実現

エクセルシオール稲毛海岸様では「夢プラン委員会」という委員会を設け、ご入居者様一人一人の夢を聞き、実現のためのプランを練っています。先日は魚釣りをしたい！という方々の夢を叶えました。皆さんとても喜んで釣りを楽しまれたそうです。（写真⑥）

地域交流

取材当日、偶然にも近隣の小学校からお子さんたちが施設に訪問して交流会を開かれていました。先日小学校の運動会をご入居者様方が見学なさったお礼に、歌をプレゼントしにいらしたそうです。お子さんたちとのふれあいにご入居者様も終始笑顔です。

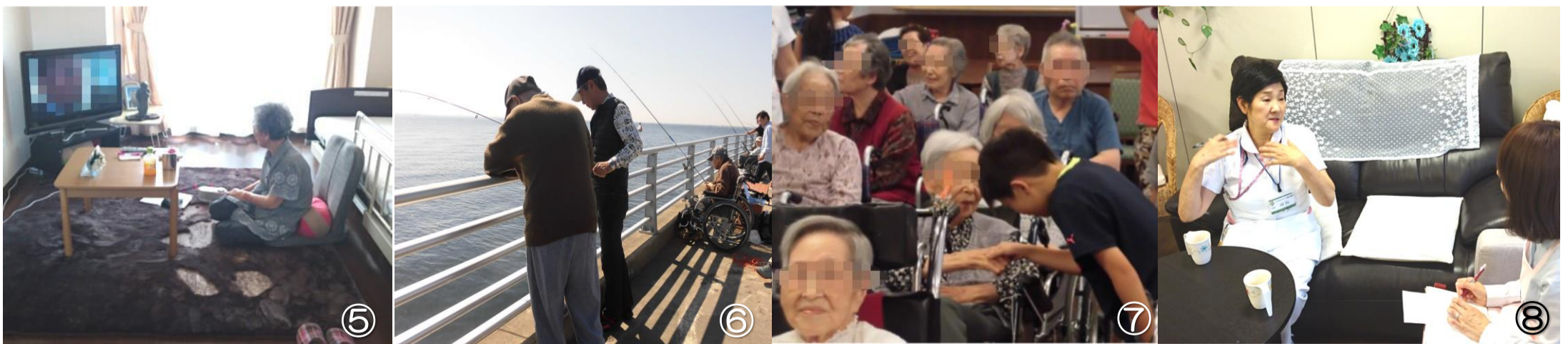
エクセルシオール稲毛海岸様では、近隣の幼稚園や地域の方々との交流会も定期的に行われています。（写真⑦）

いつまでも自分らしくいられる生活

この言葉を合言葉に、職員の皆様はご入居者様の生活を見守っています。

「施設入所＝集団生活ではなく、出来る限り今までと変わらない暮らしを送ってほしい。プライベートな生活を送る中で、ご入居者様同士の交流や地域との交流をもっていただく。こうして社会との関わりをもつことで、自分が『社会の一員である』とう気持ちを忘れず、メリハリのある生活を送っていただけないかと思う」。とお話されるのは看護師長の菅野様。（写真⑧）

ここが有料老人ホームだということを忘れてしまうくらい、素敵な暮らしの詰まった心温まる施設様でした。



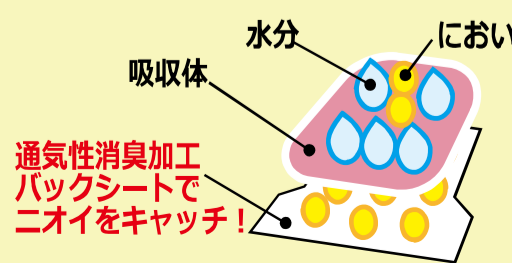
オンリーワン幅広テープに消臭効果をプラス！



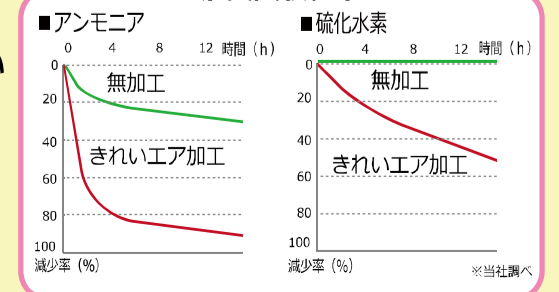
新開発「きれいエア」

消臭加工の通気性バックシート採用！
 外へと通り抜けようとする臭いをキャッチします。

消臭効果のイメージ



消臭試験結果



※当社調べ